

＜PGI 学術講演抄録＞※無断転載を禁じます

総合的治療を実践するには何が必要なのか？

～顎関節症治療の理論と実践～

東京都千代田区開業

塚原 宏泰

顎関節症はいまや国民の多くが知るところとなり、歯科医師が対応する疾患であるという認識も一般化しています。その治療には、対症療法と原因療法が存在し、多くの治療者はその対応を混同していると思います。顎関節症の患者は、対症療法を行うことでその多くは症状の緩解に向かうのですが、口腔機能や咬合を考慮すると患者の将来に不安を抱く症例もあります。歯科医として歯科的要因や心理的要因をそのままにしていいるのだからかと、つまり顎関節の症状がとればそれだけでいいものなのか考えてしまうこともあります。

しかしながらすべての原因を歯科的要因と直結してしまうと、過剰な切削や補綴がはびこり、オーバートリートメントになることは否めません。また不正咬合や咬合のずれなどが全身に対する影響も大きいとは思いますが、この事については個人差も大きく、決定的な証拠は得られていないのが現状です。

今回私の講演の中では、長年携わってきた顎関節症の治療方法や結果だけでなく、その効率性や患者の背景などをもトータルに見ていただけたら幸いです。

総合的治療という演題について

開業医において、専門医やインターディシプリナリーが認知されるようになってきました。しかしながら、一部の成功事例以外は、大学病院を含めてもあまり聞きません。私自身、口腔外科専門医および顎関節専門医として長年にわたりインターディシプリナリーの治療に携わりましたが、いつも一定のジレンマを持ってやってきました。

そんな思いを解消すべく、開業してからは補綴分野や矯正分野の知識や技術の不足を補い、患者さんをトータルで見たいところざし現在に至っています。臨床とはエビデンスという言葉だけで片付けられないことばかりで、患者の背景やライフステージを考慮し、偏りがなく幅広い守備範囲の治療選択に対応できることなどが大切であろうと考えております。

塚原 宏泰 (つかはら ひろやす)

略 歴

- 1989年 日本大学松戸歯学部卒業
- 1989年～98年 東京医科歯科大学第2口腔外科勤務
- 1998年～ 東京都千代田区にて開業
- 2004年～ 東京医科歯科大学顎口腔外科客員臨床教授
- 2012年～ 日本大学松戸歯学部顎顔面外科兼任講師
神奈川歯科大学補綴科非常勤講師

専門医など

- 1997年 日本口腔外科学会専門医
歯学博士
- 2002年 日本口腔外科学会指導医
日本顎関節学会専門医・指導医
- 2009年 日本顎顔面インプラント学会指導医